



原水爆禁止2015世界大会参加報告②

それぞれの立場で、それぞれのできる行動を！

開会集会、ヒロシマデー集会では、多くの方が壇上に立ち、それぞれの訴えを行いました。心に残った言葉をいくつか紹介します。

▼宝田明さん～「ゴジラ」に込められた核廃絶への思い

開会集会には、俳優の宝田明さんが連帯のあいさつに立ちました。宝田さんは、中国北東部のハルピンで終戦を迎え、やっとの思いで日本に引き揚げてきました。東宝に入った宝田さんは、自身が出演した映画ゴジラへの思いを語ります。

広島、長崎に続き、ビキニで被災した第五福竜丸事件を目の当たりにして、「黙っている訳にはいかない。世界に向けて警告を発することができるのは日本しかない」と映画「ゴジラ」が出来上がりました。

大ヒットしたその映画も、アメリカでの公開では水爆実験との関わりがスッパリとカットされ、中身のない映画となってしまったといいます。戦争遂行に当たって都合の悪い部分は、こうして目に触れないようにされていくようです。

今の日本について宝田さんは、「きな臭い世の中になっている。日本は被爆国であり、憲法第9条を持ちながら、それがなし崩し的にどんどん大地の中に埋もれていくような危うい時期にさしかかっています」「今、日本国中で夜も寝られないで考え込み悩んでいるのは、おそらく安倍さんではないか。果たして今回の一連の戦争関連法案が良かったのかと」「安倍さんに申し上げます。もう白旗をあげなさい」と話しました。



▼被爆者の体験談～軍隊が守るのは国民ではない

開会集会で壇上に立った被爆者の坪井直さんのお話です。原爆が落ちた当時の状況を語りました。

当時20才の学生で爆心地から1.2キロの地点で吹き飛ばされました。あてもなく逃げ中でのいろんな人に出会いました。右目が飛び出た女学生、ガラスの破片が突き刺さった人、飛び出した腸を抑えながら歩く婦人、どこが顔だかわからない死体。みんな夢や希望を持っていた人たちです。



そんな折、臨時の診療所が開設されたと聞き、行ってみると、ただ人が集まっているだけ。しばらくすると、軍の軽トラックがやってきて、女性や子どもには目もくれず、若い男性だけを治療のために連れて行きました。軍にとって、女性や子どもは戦争に役に立たないから、助けても意味がないのです。

最後に、坪井さんは「現在90歳ですが、命のある限りみなさんと一緒に頑張ります。」と話し、会場から大きな拍手が起こりました。

▼被爆者の体験談～様々な圧力、嫌がらせにも負けない力強さ

広島で被爆したカナダ在住のセツコ・サーローさんは、13歳で中学二年の動員学徒だったその日、爆心地から1.8km離れたところで被爆しました。当時の悲惨な状況について語りました。

その後、渡米した時、その年に米国の水爆実験がビキニで行われたことについてどう感じるかについてインタビューを受けました。広島と長崎は、核実験の始まりではなく、終わりであるべきだったのですと答えました。このインタビューが掲載されると、「日本へ帰れ!」「真珠湾を忘れるな!」などと書かれた手紙が届きました。殺すぞという脅迫状もありました。

一時はもう二度と話すまいとも思いましたが、この事件は、結局は決意を強めただけだったといえます。その後も平和運動を積極的に続けた結果、北米でも核兵器廃絶の声は大きなひろがりを見せています。状況が厳しいからといって諦めない力強さを感じました。



▼被爆者の体験談～67年目によく目覚めたセミ、これからも鳴き続ける

クミコさんの歌のステージで演奏を担当したのは、胎内被曝したピアニスト・好井敏彦さん。ピアノは、1938年に製造され、被爆しながらも演奏ができるよう修復された「被爆ピアノ」でした。

子どもの頃、ピアノの前に座ると、誰に教えてもらったわけでもないのにピアノが弾けたそうです。なぜ自分が生まれつき弾けたのか、自分自身、わからなかったと言います。

ある日、自分と同じく、広島で被曝したピアノが巡り巡って、目の前に。このピアノを弾いた瞬間、「このために自分は今まで生かされていたのだ」と感じました。「自分は、セミだ。62年間、土の中にいて、ようやく目覚めたセミだ。これからもずっと鳴き続ける。」と、世界中で反戦のピアノを弾いているのです。



▼今、自分ができる行動を、自分にできるやり方で

この他にも、数多くの方が発言したり、映像でメッセージを寄せています。病床からメッセージを届けた被爆者の方もいます。

同じ被爆者でも、訴え方は、人それぞれ違います。みんな、違う人生を歩んでこられたのだから当然です。それぞれの方の歩んだ人生をもとに語られる訴えだからこそ、聴いた人の心を打つのです。

大会に参加して、いろいろな方の話を聞きながら、自分の人生とは何か、自分だからこそできる行動とは何か、とても考えました。子どもたちの未来に責任を持つ仕事をしている私たちが、自分ができる行動を、ともにがんばっていきましょう!

